

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

—トリスタンの少年期について—

Gottfrieds »Tristan und Isord«

—Über Tristans Jugendjahre—

斎藤 芙美子

(1)

リヴァリーンとブランシェフルールの¹⁾「至福へ導びくが、最後には破滅に陥れる力²⁾」となったミネの結晶として生まれたトリスタンの14才までの少年期(1791行から3756行³⁾)から、彼の特質を探ってみたい。この箇所はベヒシュタイン版によるとⅢ. RUAL LI FOITENANT (忠義者ルーアル) IV. DIE ENTFÜHRUNG (誘拐) V. DIE JAGD (狩り) VI. DER JUNGE KÜNSTLER (若い芸術家)ということになる。

Riuwe unde stætiu triuwe	悲しみと変らない誠が、
nach vriundes tode ie niuwe,	友の死後にもいつも新たに蘇るとき、
da ist der vriunt ie niuwe:	その時友はいつも新たに蘇る。
daz ist diu meiste triuwe.	これこそ最高の誠である。
1795 Swer nach dem vriunde riuwe hat,	友のために悲しみ、
nach tode triuwe an ime begat,	その死後も誠を彼にささげるとき、
daz ist vor allem lone.	これこそ報恩以上のことであり、
deist aller triuwe ein crone.	すべての誠のうちで王冠である。

以上のような書き出しで始まる〈忠義者ルーアル〉の章で、ブランシェフルールの死とひきかえに生まれた孤児の生いたちが語られるのである。「すべての誠のうちで王冠である」とゴットフリートが称賛したこの忠義者の「將軍と將軍夫人はこの小さな孤児を引きとり、人々の目から全くこっそりとかくした⁵⁾」のである。というのも、領主リヴァリーンとその奥方ブランシェフルールの亡くなった今となっては、その孤児だけが生き残ったことは、却って危険であった。そこで取り敢えず宿敵モルガンと和平を結び、亡き領主の遺児を立派に育てあげようとルーアル夫妻は決心したのである。

「この人の世のことは、しばしば禍となることも、その禍から転じてまた福となるものだ⁶⁾」と詩人ゴットフリートが運命の不可思議を指摘しているように、この孤児は忠実な將軍ルーア

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

ルと、「気だてのよい、常に変らぬ心の、清らかなフロレーテ、婦人としての声望の鏡であり、善良そのものの宝石⁷⁾」である將軍夫人によって、実の子として育てられる幸運に恵まれた。

將軍夫人の生んだ男の子として洗礼を受けるとき、ルーアルはフロレーテに次のように語っている。

<p>'seht' sprach er 'vrouwe, als ich vernam von sinem vater, wiez dem kam umb sine Blanscheffiure, mit wie vil maneger triure 1995 ir gernder wille an ime ergie, wie si diz kint mit triure enpfie, mit welher triure siz gewan, so nenne wir in Tristan.'</p>	<p>「ねえ、お前」と彼は云った、「この子の父君から聞いたのだが、あの方とブランシェフルール様がどうあそばされたことか、奥方のほうもどんな深い悲しみをいだいてあの方への思いをとげられたことか、どんな悲しみをもってこの子を授けられたことか、どんな悲しみをもってこの子を生まれたことか、だからこの子をトリスタンと名付けよう。」</p>
---	---

さらにゴットフリートは次のような説明をつけ加えて、この孤児トリスタンの未来を読者に暗示する。

<p>nu heizet triste triure 2000 und von der aventiure so wart daz kint Tristan genant, Tristan getoufet al zehant. diz mære, der daz ie gelas, der erkennet sich wol, daz der nam 2020 dem lebene was gehellesam: er was reht also er hiez ein man und hiez reht also er was: Tristan.</p>	<p>さてトリステとは悲しみを意味し、彼の運命にふさわしくこの子はトリスタンと名づけられ、トリスタンはすぐに洗礼を施された。 この物語を今までに読んだ人は、きっとみとめるだろう、この名がその生涯にぴったりだったということ。彼はまさしくそう呼ばれるような男であったし、彼はそうであったからこそトリスタンと呼ばれた。</p>
--	--

こういう詩人の言葉から、「トリスタンという人物の運命の中には、とくに男性的なもの、つまりゴットフリートの男性観が、体现されるだろうとの意味において、トリスタンの生涯はとにかく典型的であるということ、ここで既にまた暗示しているように見える」とタックス⁸⁾(Petrus W. Tax)は指摘する。筆者も詩人が主人公のトリスタンという名に特別の感慨を抱いたであろうと考える。「プロローグ⁹⁾」において「快い苦しみ、貴い悲しみ、心の悦び、愛の苦しみ、悦びの生、苦しみの死、悦びの死、苦しみの生」を合せもつことを理想と謳った人生観の持ち主であるゴットフリートが、トリスタンという名前に、彼の理想の象徴を託したとしても不思議ではないのである。

さて、トリスタンが將軍夫人フロレーテの慈しみをうけて7才になった時、

<p>2060 sin vater der marschalch in do nam und bevalch in einem wisen man: mit dem sander in iesa dan durch vremede sprache in vremediu lant; und daz er aber al zehant</p>	<p>彼の父、將軍が今度は彼をひきうけある教養高い人物に彼を託した、この人物とともに彼を直ちに外国語を学ぶため外国へ送り出した。その上すぐさま彼に</p>
---	---

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

<p>2065 der buoche lere an vienge und den ouch mite gienge vor aller slahte lere. daz was sin erstiu kere uz siner vriheite:</p> <p>2085 der buoche lere und ir getwanc was siner sorgen anevanc; und iedoch do er ir began, do leite er sinen sin dar an und sinen vliz so sere, 2090 daz er der buoche mere gelernete in so kurzer zit dan ie kein kint e oder sit.</p>	<p>読書の修業を始めさせようとした、 しかも他のあらゆる修業に先立って この修業に専心させようとした。 これは彼の自由から離れる 第一歩となった。</p> <p>読書の修業とその重圧は 彼の憂いの始まりであった。 にも拘らず、彼がそれを始めたとき それに対して彼の全身 全霊をかたむけたので 彼ほどたくさんの本を 非常に短い間に読んだ子供は 後にも先にもなかった。</p>
---	---

将軍ルーアルの教育方針がトリスタンにもたらした「正反対の側面に詩人は注目している」¹⁰⁾点
がまことに興味深い。素晴らしい能力を発揮できるにも拘らず、読書の修業がトリスタンにとっ
て「憂いの初りであった」とゴットフリートが敢て指摘した理由は何であったのだろうか。

その鍵は次の詩句にかくされているように思われる。

<p>Under disen zwein lernungen der buoche unde der zungen 2095 so vertet er siner stunde vil an ieglichem seitpil: da kerte er spate unde vruo sin emezekeit so sere zuo, biz er es wunder kunde. 2100 er lernet alle stunde, hiute diz, morgen daz, hiure wol, ze jare baz.</p>	<p>書物と言葉という 二つの修業と並んで 彼は多くの時間を いろんな種類の弦楽器の演奏に費した。 朝から晩までそのために 非常に熱心にはげんだ、 それを立派に弾きこなすまで。 彼は練習した、何時間でも、 今日はこれ、明日はあれと、 今年のうまさに、翌年は一段と上にと。</p>
--	---

幼いトリスタンのこの seitpil (弦楽器の演奏) に対する情熱の描写こそ、詩人が読者に与え
た回答であろう。天賦の才に恵まれた少年トリスタンにあって、彼の本質に最も適している分
野は音楽であることをゴットフリートは暗示しているように思われる。

このような学問的な分野や芸術的な分野以外にも少年トリスタンが槍投げや乗馬といういわ
ゆる騎士的な修業にも精を出したということに詩人はふれているが、読書の修業や音楽への情
熱を描写した箇所には約四十行余りが費されたのに比べ、騎士的な修業には十数行しかされ
ていない。このことをみても、どちらの叙述に詩人の力点が置かれていたかは自明である。

このようにいろんな分野に才能を発揮するトリスタンを描きながら、その最後を詩人は次の
ような言葉でしめくくっている。

<p>nu was aber diu sælde undersniten mit werndem schaden, als ich ez las,</p>	<p>だがしかしその幸福は、私の読んだ所では、 絶えざる辛苦とないあわされていた、</p>
---	---

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

2130 wan er leider arbeitsælic was.

というのも彼の中では幸福と辛苦は表裏一体であったから。

この表現の中には、「まさに先例のないような天賦に恵まれ、幸福を約束されているように見える若者を描き出しながら、自己開花の幸福を諦めと辛苦で支払わねばならないような、こんなにも豊かに備わっている天性の諸刃の結果に対するゴットフリートの暗示が入っている¹¹⁾」とヴェーバーは述べているように、明らかに詩人の人生観を見て取ることができる。この arbeitsælic という言葉は、「労苦 (arbeit) と悲しみに結びついていないような幸福 (sælde) というものは、トリスタンには一つもない¹²⁾」ということの意味する形容詞としてここでは用いられているが、「プロローグ」において悦び (liebe) と苦しみ (leit) の統一体験を理想と看し、「リヴェリーンとブランシェフルール」においては「至福へ導びくが、最後には破滅に陥れる力」を見きわめてきたゴットフリートが、彼の理想とする主人公の生涯を形容するのに最適の言葉として arbeitsælic を選んだのも当然である。

(2)

7才から外国語の修業のため国外へ旅していたトリスタンは14才の時、再び故郷パルメニーエに呼び戻されたのであるが、ある日ノルウェーの商船がこの国へやってきた。「この商船では鷹やそのほかの美しい鳥が買える¹³⁾」という噂が城の中までも伝わり、興味をかきたてられたトリスタンは、この異国の商船を訪れたのだが、誘拐される結果になる。なぜ異国の商人たちは、彼を誘拐しようとしたのか、その理由を詩人は次のように書いている。

si nam des wunder, daz ein kint	彼らはおどろいた、子供が
so maneger sprache kunde;	こんなに沢山の言葉を知っていて
die vluzzen ime ze munde,	それを流暢に口にするのに。
2285 daz siz e nie vernamen,	どこの国へ行っても
an swelhe stat si ie kamen.	こんなのを聞いたことがなかった。
der höfsche hovebære	みやびやかに教養をつんだこの若者は
lie siniu hovemære	彼の上品な洗練された云いまわしと
und vremediu zabelwortelin	外国のチェスの用語を
2290 under wilen vliegen in:	その間にはさむのだった、
diu sprach er wol und kunde ir vil,	そんな言葉を上手にしゃべり、沢山知っていた。
da mite so zierter in sin spil.	そのため彼のチェスを一層はなやかにした。
ouch sang er wol ze prise	また彼はとても素晴らしく歌うのだった、
schanzune und spæhe wise,	歌の数々を、美しいメロディーを、
2295 refloit und stampenie.	リフレインのついた歌を、踊りの歌を。
alsolher curtosie	このような優雅な洗練された態度を
treip er vil und so vil an,	彼はいろいろとしてみせたので
biz aber die werbenden man	この商人たちはとうとう
ze rate wurden under in:	互に意見が一致してしまった、

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

2300 kunden sin iemer bringen hin mit keiner slahte sinnen, si möhten sin gewinnen grozen vrumen und ere;	もしも彼をなにか策を弄して つれ去ってしまうことができれば そのおかげで大きな利益と名与を 手に入れられるのではないかという事に。
--	--

ここでも詩人は少年トリスタンの最も人目をひく特徴は、外国語の豊富な知識と音楽の才能であることを再び明確にしている。

この誘拐は成功したかに見えたのだが、「その時すべてを司る方が、調停し治める方が、風も海も万物がおそれ従う方が、全てを妨げられた。この方が望まれ命じられると、海上に恐ろしい嵐の苦難が生じ、彼らはみんな最早やどうすることもできなかつた¹⁴⁾」とゴットフリートは書いている。この場面に関してタックスは次のような指摘をしている、「フランス語の原典では単に雨あられや雷光を伴う嵐が盗人たちの計画の邪魔をするというようにのべられているのに対し、ゴットフリートの場合、この重要な転換点で神自らが明確に干渉している¹⁵⁾」。

神の怒りをおそれた商人たちは陸地が見えるやすぐトリスタンを解放した。そこはコーンウォールの国、即ちブランシェフルールの兄、マルケ王の国であったのだが、トリスタンはもちろんそんなことを知る由もない。トリスタンは自分の不幸を嘆き悲しんでいる時、二人の年老いた巡礼者に会う。「その時若さに似ず、大変用心深くて賢明であったトリスタンは、つくり話をしゃべり始めた¹⁶⁾」。つまり、彼はこの国の生まれで、狩の途中で仲間を見失ったから、二人の巡礼の老人たちと同道したいと願い出たのである。

(3)

トリスタンが二人の巡礼者とコーンウォールの都、ティンタエールを目指して進んでいたとき、「彼の伯父、コーンウォールのマルケ王の猟犬たちが、丁度その時一匹のたくましい鹿を追って道の近くへやってきた¹⁷⁾」。それを見たトリスタンは、仲間が見つかったといって巡礼の老人たちと別れを告げる。

このマルケ王の家臣たちの狩猟の一団との邂逅によって、トリスタンにはマルケ王のもとへ導びかれる幸運が開かれるのであるが、その運を開いたのは、コーンウォールの人々の知らなかった新しいトリスタンの狩猟技術であった。

Tristan sprach: 'lieber meister min, sol ez mit iuvern hulden sin 2825 und mag iu lieb dar an geschehen, so laze ich iuch vil gerne sehen als verre als ichs gemerket han, wie min lantsite ist getan, als ir da vraget umbe den bast.'	トリスタンは云った、「狩猟長さま、もしあなた様のお許しがでてあなた様のお気に召すのならば、私はよろこんでおみせしましょう、私の知っている限り私の国でどうしているかを、あなた様が鹿皮の剥ぎ方をおたずねですから。」
---	---

こうしてトリスタンは生国パルメニーエで行われている bast (鹿皮を剥ぎ、解体する方法)

や *furkie* (獲物の内臓をフォーク状の二叉の枝で固定する方法) や *curie* (一定の大きさに切って内臓物を猟犬の餌に与えること) という狩猟技術をコーンウォールの人々に教えた。

トリスタンの示す新しい狩猟技術におどろいた人々は、「ねえ、素晴らしい少年よ、君がわれわれにみせてくれたこの驚くべき違いは、いろいろ沢山あるようだ。もし最後までどうするかを見届けられないのなら、君が今までしてくれたことも、水の泡になってしまう¹⁸⁾」といて、トリスタンに城まで同行してくれるように頼んだのである。

道中素姓をきかれたトリスタンは「慎重に再びつくり話をし始めた。彼の話し振りは、まったく子供の年に似合わぬものであった¹⁹⁾。彼は自分をパルメニーエの商人の子であると偽り、外国のことを知りたくて外国の商船にのりこんで、この地にやってきたと語った。それを聞いた人々は「親愛な友よ、素敵な少年よ、一人の商人がこんな立派な子供を育てた国こそ神の祝福あれ！ 今おいでのどの王様といえども、これ以上立派な子供をお育てにはならないだろう²⁰⁾」と感心するのである。

そして彼の名がトリスタンであるということを知ったとき、

'deus adjut' sprach einer do
'durch got, wie nante er dich do so ?

du wærest zware baz genant

3140 juvente bele et la riant,
diu schœne jugent, diu lachende.'

「おお、神さま」とその時一人がいった、
「これはまあ、どうして父君は君にそんな名をつけられたのか。
君はほんとはもっといい名をつけられてよかったのに。
juvente bele et la riant, というように。
美しい少年、ほほ笑みをたたえた少年というように。」

人々の目には、この輝くばかりに美しい少年に、トリスタンという悲しみを意味する名前は不似合だと思われたのである。

こうしてトリスタンは彼の狩猟技術によって、コーンウォールのマルケ王の城へと導かれてきたのであるが、城門の前でまたもや人々を驚かすことになる。つまり彼はその時素晴らしい角笛を吹いて聞かせたのである。「王も宮廷の人々もこの耳なれない狩猟の歌を聞いた時、彼らは心の底からびっくり仰天した、というのもこれまで一度も宮廷ではこんな歌をきくことはなかったから²¹⁾。ここでもトリスタンはその素晴らしい音楽の才で人々の目をひきつけたことを詩人は明らかにしている。

このめずらしい角笛の主をみようとしてマルケ王が出てこられた時、「トリスタンは王をみるや、他の誰よりも王が好きになった、他の誰よりも。王を彼の心が特に選び出したのであった、というのも王は彼の血のつながった人だったから。本能が彼をひきつけたのであった²²⁾」。

どんなにトリスタンの狩猟技術がすぐれているかをきかれたマルケ王は、トリスタンに「私の狩猟長になってもらいたい²³⁾」と申出られた。こうしてトリスタンは狩猟長としてマルケ王に仕えることになったのであるが、この当時の彼の美しさを次のように詩人は叙述している。

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

<p>dar zuo was ime der lip getan, als ez diu Minne gebot: sin munt was rehte rosenrot, 3335 sin varwe lieht, sin ougen clar; brunreidelohht was ime daz har, gecruspet bi dem ende; sin arme und sine hende wol gestellet unde blanc; 3340 sin lip ze guoter maze lanc; sine vüeze und siniu bein, dar an sin schoene almeistic schein, diu stuonden so ze prise wol, als manz an manne prisnen sol.</p>	<p>その上彼の身体のつくり具合は ミンネ（愛）が命じた通りであった。 彼の唇は丁度バラのように赤く 彼の顔色は晴々とし、彼の瞳は輝き、 彼の髪はくり色で波をえがき 先端で美しく巻き上っている。 彼の腕と彼の手は 美しい形の上に色は白い、 彼の体軀は均整のとれた丈であり 彼の足と脚は とくに美しさの目立つところだが、 素晴らしい形につくられているので これこそ男性美と称えざるをえなかった。</p>
--	--

(4)

いわゆる「若い芸術家」の章が、これから展開するのであるが、ゴットフリートはここでもう一度トリスタンがその素晴らしい狩猟技術、すなわち *bast* や *furkie* や *curie* をマルケ王に披露する場面を挿入している。こうして詩人はトリスタンの狩猟技術がマルケ王や宮廷の人々をいかに魅了したかを二度にわたって描写した後、次のような結びをつけている。

<p>als was der guote Tristan sider ein lieber hoveman under in. küneec unde gesinde hæten in in guoter geselleschaft. 3490 ouch was er also dienesthaft dem armen unde dem richen: möhter ir iegelichen uf siner hant getragen han, daz hæte er gerne getan. 3495 die sælde hæte im got gegeben, er kunde und wolte in allen leben:</p>	<p>こうして素晴らしいトリスタンはそれ以後 彼らのもとで愛される宮廷人となった。 王も家臣たちも彼を 善意ある友情でつつんだ。 彼もまた貧しい人にも富める人にも 同じようによくつとめた。 もしも彼はそれらの人々の誰でも 彼の手のにせて運べるものなら 彼はよろこんでそうしたことであろう。 このような恩寵を神は彼に与えられたのだった、 彼は全ての人のために生きることができたし、そ う願っていた。</p>
---	--

この言葉によって、マルケ王の宮廷で異国の少年が家臣として寵愛を受けたのは、また彼の内面的な美しさのためでもあったことが示されている。

外面的にも内面的にも美しい少年であったトリスタン、マルケ王の狩猟長は、王をもっと驚かせ魅了することになるのである。その一つは彼の音楽における才能であり、もう一つは語学の才能であった。そのエピソードを詩人は次のように書き始める。

<p>3505 Nu gevuogete sich daz, daz Marke an eime tage gesaz</p>	<p>さて次のようなことがおこった、 マルケ王はある日</p>
---	-------------------------------------

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

ein lützel nach der ezzenzit,	食事のすぐ後で、とある所に坐られ
so man doch kurzewile pflit,	ゆっくりとくつろがれ
und losete sere an einer stete	熱心に耳をかたむけられていた、
3510 einem leiche, den ein harpfær tete,	豎琴弾きの奏である曲に。
ein meister siner liste,	その人はこの道の達人であり
der beste den man wiste;	人に知られたうちの最高の弾き手であった。

この豎琴の音に接するや、トリスタンは「感激が高まり、胸はその感動で一杯になった²⁴⁾」のである。思わずトリスタンはその曲名を口に出してしまう。その博識におどろいた豎琴弾きは、彼にぜひ弾いてみせるようにと勧めると、トリスタンは豎琴を手にとって美しくかなで始めた。

nu Marke der sach allez zuo	さてマルケ王は全てのことをごらんになり、
und saz allez trachtende,	すべてのことを考え
sinen vriunt Tristanden ahtende	彼の友トリスタンを注目しておられたが、
und wundert in des sere,	トリスタンが自分の身についた
3580 daz er so höfsche lere	このような優雅な教養を
und also guote liste,	このような立派な芸を
dier an im selben wiste,	このようにかくしていたことを
also verhelen kunde.	大変不思議に思われた。

トリスタンの素晴らしい演奏に恍惚となった聴衆達は、「ああ、このような教養ある息子をもった商人こそ幸かな²⁵⁾！」と思わざるをえなかった。

トリスタンは豎琴を美しい音色で演奏したばかりではなく、また「彼は曲のメロディーに合わせてブルターニュ語やウエールズ語、ラテン語やフランス語でとても甘く歌ったので、彼の豎琴演奏と彼の歌のどちらがより美しく、より称賛すべきか、誰にも判断がつかなかった²⁶⁾」。

トリスタンの見事な演奏や歌に感心されたマルケ王が、トリスタンにもっと他の楽器ができるのではないかとたずねられた時、彼は「王様、私はいろんな弦楽器を学ぼうと努力いたしました、もうこれ以上うまくは弾けないというまで、どの楽器もこなしたわけではございませ²⁷⁾ん」と遠慮がちにいいながらも、videln（五弦の古いバイオリンを演奏すること）、symphonien（手回し風琴を演奏すること）、harpfen（豎琴をひくこと）、rotten（ハープ風の琴ロッテをひくこと）、liren（リラをひくこと）、sambjut（プサルテリウム—中世楽器—）などを学んだことを告げている。

また歌ってみせたような「いろんな言葉ができるのか²⁸⁾」というマルケ王の質問に対して、「はい王様、まあかなり²⁹⁾」と彼が答えると、「すぐさま沢山の人が押しよせてきて、近隣の国の外国語をできる人は、すぐさまあれやこれや彼を試してみた³⁰⁾」のである。それに対してトリスタンはノルウェー語で、アイルランド語で、ドイツ語で、スコットランド語でまたデンマーク語でていねいに答えた。

人々は「ああ、トリスタン、君のようであればなあ³¹⁾！」と感嘆の声をあげ、「方々、聞きたまえ、14才の子供がこの世のあらゆる芸を心得ているのだ³²⁾！」と叫んだ。

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

Der küneec sprach: 'Tristan, hoere her:	王は語られた、「トリスタン、よく聞きなさい、
an dir ist allez, des ich ger;	おまえは私の欲することが全てできる、
du kanst allez, daz ich wil:	狩猟に、いろんな言葉に、弦楽演奏に。
jagen, sprache, seitspil.	さあ、われわれは互に友達になろう。
3725 nu suln ouch wir gesellen sin,	君は私のものであり、
du der min und ich der din.	私は君のものだ。」

こうして異国の14才の少年はコーンウォールの国でマルケ王の「³³⁾宮廷の信頼厚い一員」となったのである。

(5)

以上のように少年期までのトリスタンの成長過程をたどってみると、最後のマルケ王の言葉に要約されているように、トリスタンの特性をゴットフリートが狩猟技術と語学と弦楽演奏という点で扱っているのは明らかである。中世の騎士階級が最も活躍したこの時代に、ゴットフリートがこのようなトリスタン像を描き出そうとしていることは、非常にわれわれの興味をそそる。モーア (Wolfgang Mohr)³⁴⁾ が明らかにしているところでは、ゴットフリートに先立って12世紀に存在したといわれる三つのトリスタン物語、すなわちトマ (Thoma)³⁵⁾、アイルハルト (Eilhart)、ベルール (Béroul) の作品におけるトリスタン像と、ゴットフリートのそれとはかなりの相違があるようである。ゴットフリートが「プロローグ」で正しい原典として上げているトマの場合でも、トリスタンは造形芸術家として特徴づけられているようだ。またアイルハルトの場合は、トリスタンがまず修業するのは騎士的なスポーツの技術であって、マルケ王の宮廷での修業の後に、アイルランドへ旅した時に初めて竖琴弾きの役割を演じるらしい。しかも芸術家としての世界はそれほど美的に叙述されてはおらず、彼の最も目立った能力は槍投げ、跳躍、投石などであって、英雄叙事詩のジークフリート像に近いといわれている。またベルールの場合はトリスタンは必ず当る弓の発明者として特徴づけられているらしい。

こういうゴットフリート以前のトリスタン像と、ゴットフリートのトリスタン少年を比べてみると本質において大きな相違があるといわざるをえない。ゴットフリートのトリスタン少年は、商人の息子という建前に立ちながら、その優れた狩猟技術と外国語の知識と音楽の才能とによってマルケ王の寵愛をうける宮廷人となることができたのである。このことは騎士階級の出身でなくとも、宮廷社会で名声と昇進を獲得することができるということを物語っているのであって、ジャクソン (W. T. H. Jackson) の言葉を借りるならば、「トリスタンによって、³⁶⁾宮廷に新しい顔、新しいタイプが出現したのである」。

しかし騎士でなくて、このような成功をおさめるには、「優雅な教養」(höfsche lere) と「立派な芸」(guote liste) の持ち主、いいかえれば芸術家であることを必要とした。ノルウェーの商人たちがおどろくべき知識と才能をもったトリスタン少年を誘拐すれば「大きな利益と名

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

与を手に入れられる」と考えたのも、トリスタンの芸術家的特性の将来性を予期したからであろう。

この誘拐の場面はトマとゴットフリートの作品にのみ描かれているといわれるが、これは「一つの社会的記録とみなしうる」³⁷⁾のであって、芸術家的特性の持ち主がその出身とは余り関係なく成功をおさめうる可能性があったからこそ、このようなエピソードも読者にとって不自然には感じられなかったのであらうと思われる。

このように「優雅な教養」と「立派な芸」の持ち主となったトリスタンの少年期を描写している中で、ゴットフリートが最も力点をおいて描いたのは、トリスタンの音楽に対するよこびとその才能であったといえよう。例えば、7才で修業の旅に出たトリスタンがもっとも情熱をかきたてられたのは弦楽演奏 (seitspil) であったし、14才でノルウェーの商船に誘拐される原因となったのも、外国語の知識と並んで彼の歌の素晴らしさであった。また彼の狩猟技術が彼をマルケ王のもとへ導びいていった際も、彼の吹きならす角笛の音がマルケ王を城門へと誘い出したのであるし、マルケ王の宮廷で狩猟長として暮すようになった折も、「感激が高まり、胸はその感動で一杯になった」のは、彼が竖琴弾きの名手に出会った時であった。

こうしてみると、ゴットフリートが少年トリスタンの本質に最もかなった芸術家的特性として、音楽的才能を設定していることは明瞭である。

註

- 1) 研究論集第25巻51頁抽稿参照
- 2) Gottfried Weber: Gottfried von Strassburg Tristan, Text, Nacherzählung, Wort und Begriffserklärungen. 1967, S. 552
- 3) 上記の G. Weber の Text からドイツ語を引用。
- 4) Gottfried von Strassburg, Tristan. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein hrsg. von Peter Ganz. 2 Teile 1978
- 5) 1823—1826
der marschalch und diu marschalkin
namen daz cleine weiselin
1825 und burgen ez vil tougen
den liuten von den ougen.
- 6) 1865—1868
1865 Sich treit der werlde sache
vil ofte zungemache
und aber von ungemache
wider ze guoter sache.
- 7) 1906—1908
diu reine Floræte,
diu wibes ere ein spiegelglas
und rether güete ein gimme was,
- 8) Petrus W. Tax: Wort, Sinnbild, Zahl im Tristanroman 2., durchgesehene und erweiterte Auf-

- lage 1971 S. 26
- 9) 研究論集第23巻53頁拙稿参照
- 10) G. Weber: *ibid.*, S. 580
- 11) G. Weber: *ibid.*, S. 581
- 12) G. Weber: *ibid.*, S. 826
- 13) 2166—2167
da wæren valken veile
und ander schoene vederspil;
- 14) 2406—2415
do widerschuof ez allez der,
der elliu dinc beslihtet,
beslihtende berihtet,
dem winde, mer und elliu craft
2410 bibenende sint dienesthaft.
als der wolt unde der gebot,
do huop sich ein so michel not
von sturnwetere uf dem se,
daz salle samet in selben me
2415 enmohten niht ze staten gestan,
- 15) P. W. Tax: *ibid.*, S. 27
- 16) 2692—2694
Tristan der was vil wol bedaht
und sinnesam von sinen tagen,
er begunde in vremediu mære sagen:
- 17) 2760—2765
2760 sines ceheimes hunde,
Markes von Curnewale,
die hæten zuo dem male,
als uns daz ware mære saget,
einen zitegen hirz gejaget
2765 zuo der straze nahen.
- 18) 3065—3071
3065 'sich' sprachen si 'sæligez kint:
diu wunderlichen underbint,
diu duns vür zelst und hast gezalt,
diu dunkent uns so manicvalt:
wirn sehen si noch baz zende gan,
3070 swaz du biz da her hast getan,
daz ahte wir ze nihte.'
- 19) 3092—3095
vil sinnecliche er aber began
sin aventiure vinden.
sin rede diun was kinden

- 3095 niht gelich noch sus noch so.
20) 3128—3133
 trut geselle, sūeziu jugent,
 gebenediet si daz lant
3130 von gote, da ie kein marschant
 erzoch so tugentlichez kint!
 alle die künēge, die nu sint
 dien erzūgen alle ein kint niht baz.
- 21) 3223—3229
 Der künic und al diu hovediet,
 do si daz vremede jageliet
3225 gehorten und vernamen,
 si erschraken unde erkamen
 vil innecliche sere,
 wan ez da vor nie mere
 da ze hove wart vernomen.
- 22) 3240—3245
 3240 nu Tristan den künic sehen began,
 er begunde im wol gevallen
 vor den andern allen;
 sin herze in sunder uz erlas,
 wan er von sinem bluote was:
3245 diu natüre zoch in dar.
- 23) 3370
 ‘du solt min jegermeister sin!’
- 24) 3520—3121
 3520 sin muot begunde im uf gan,
 sin herze daz wart muotes vol.
- 25) 3599—3600
 ‘a sælic si der koufman,
3600 der ie so höfschen sun gewan!’
- 26) 3626—3633
 er sanc diu leichnotelin
 britunsche und galoise,
 latinsche und franzoise
 so suoze mit dem munde,
3630 daz nieman wizen kunde,
 wederez sūezer wære
 oder baz lobebære,
 sin harpfen oder sin singen.
- 27) 3666—3669
 herre, ich han gevlizzen
 an ieglichem seitpil

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

- und enkan doch keines also vil,
ine kundes gerne mere.
- 28) 3693
kanstu die sprache ?'
- 29) 3693—3694
'herre, ja, billiche wol.'
- 30) 3694—3699
nu kam iesa
3695 der hufe dar gedrunge;
und swer iht vremeder zungen
von den bilanden kunde,
der versuochte in sa zestunde:
dirre sus und jener so.
- 31) 3710
'a Tristan, wære ich also duo !
- 32) 3718—3720
'elliu diu werlt diu hœere her:
ein vierzehenjærec kint
3720 kan al die liste, die nu sint !'
- 33) 3743
da ze hove ein trut gesinde.
- 34) Wolfgang Mohr: 'Tristan und Isold' als Künstlerroman, *Euphorion* 53 (1959). (引用は *Wege der Forschung* Bd. cccxx) Gottfried von Strassburg<1973の再録されたものによる。S. 248 ff.)
- 35) 研究論集第22巻43頁拙稿参照
- 36) W. T. H. Jackson: Tristan the artist in Gottfried's poem. *Publications of the modern language association of America* 77, 1962 (*Wege der Forschung* Bd. cccxx S. 288)
- 37) W. Mohr: *ibid.*, S. 252

その他の参考文献

- Kürschners Deutsche National-Literatur 4, Bd.
- Gottfried von Strassburg, *Tristan*. Hrsg. von Karl Marold Walter de Gruyter 1977)
- Gottfried von Strassburg, *Tristan*. (übersetzt von Xenija von Ertzdorff, Doris Scholz und Carola Voelkel W. Fink Verlag 1979)
- *Tristan* (translated by A. T. Hatto Penguin Books 1972)
- トリスタンとイゾルデ 石川敬三訳 郁文堂 1976